

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★

## ばかもの

2010年・日本映画  
配給/ゴー・シネマ  
120分

2010 (平成22) 年 12 月 31 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：金子修介  
原作：絲山秋子『ばかもの』（新潮社刊）  
出演：成宮寛貴／内田有紀／白石美帆／中村ゆり／浅見れいな  
／岡本奈月／浅田美代子／小林隆／池内博之／古手川祐子

### 👁️👁️ みどころ

19歳の大学生の童貞を奪う、27歳の奔放な年上女。以降セックス三昧の日に男は幸せの絶頂だったが、ある日公園で受けた仕打ちとは？村上春樹原作の『ノルウェイの森』（10年）のテーマは喪失だったが、私には本件の「喪失」の方がリアルでベター！

時は移り、10年後に再会した2人のラブストーリー（？）の展開とは？やっと、アル中を克服したのに……。やっとまともな女との結婚が見えてきたのに……。そんな声もあるだろうが、私には互いに1度ずつ呟く「ばかもの」同士の恋の方が魅力的……。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■あっちの恋愛は観念的！こっちの方がリアルでベター！■□■

目下、村上春樹原作の小説を映画化した『ノルウェイの森』（10年）が上映中だが、そこでは松山ケンイチ演じる主人公を軸に、直子（菊地凛子）と緑（水原希子）という2人の女性との性体験を中心とする恋愛劇がきわめて抽象的かつ観念的に描かれる。その時代は、私が大学時代を過ごした1960年代後半だ。しかし、本作が描く27歳のヒロイン・吉竹額子（内田有紀）と19歳の大学生・ヒデこと大須秀成（成宮寛貴）との、突然降ってわいたようなセックスづけのめくるめく恋愛劇の展開は1999年から2000年にかけてのこと。

本作冒頭のハイライトは、高崎競技場近くのおでん屋「よしたけ」の中で、店の娘・額子が父親（小林隆）の使いで店に立ち寄ったヒデを強引にひっかけるシーン。一人でビールを飲んでいた額子が、額子の母親（古手川祐子）と話しているヒデに声をかけ、「誘惑」

したのは少し強引だが、これはきっと同じスーパーの惣菜売り場で働いていた時から目をつけていたのだろう。内田有紀は私の目には中国人女優でいえば周迅によく似たイメージだが、今やアイドルを脱却した立派な演技派女優。1975年生まれだから既に35歳だが、その美しさはホンモノだ。

私の大学時代や松山ケンイチ演ずるワタナベの大学時代における女性関係と、ヒデの大学時代におけるそれが大きく異なっていることは、ヒデと山根ユキ（中村ゆり）との交際ぶり（?）をみれば明らかだ。ひょっとして、ヒデは19歳の今も童貞？本作前半は、1度マスターベーションを覚えたサルが永久にそれを続けるようなヒデのセックスへの励みぶりと、それをうまくコントロールする（?）額子とのセックスライフとその恋愛模様（?）に注目したい。

それにしても『ノルウェイの森』における恋愛は観念的だったが、こっちは超リアル！そして、私には断然こっちの方がベター。

## ■□こっちの方が、よっぽどホントの喪失では？■□

『ノルウェイの森』のテーマは喪失。ナレーションを多用したそのテーマの描き方に私は違和感を覚えたが、本作においてある日額子が見せる度肝を抜く行動は、まさにこれぞ喪失！男が19歳で女が27歳となれば、年の差は大きい。したがってヒデの姉（浅見れいな）がそんなヒデを少し心配したのは当然。また、ヒデの親友である加藤（池内博之）は同級生のメグミ（岡本奈月）とうまく付き合っているが、ヒデの女性との付き合い方にはかなり心配しているようだ。ところが当の本人は周りの心配をよそに、「餃子の王将」で餃子を買って額子のアパートに通ってはセックスづけの日々。それはそれで悪くはないが、いい加減落ちていく就職など将来のことを考えなければダメなのでは？

本作のタイトル『ばかもの』は絲山秋子の原作をそのまま使ったものだが、本作にはそのセリフが2度登場する。1度目は、飽きずに今日も展開されたセックスのあと、ヒデのあるセリフに対して額子がつぶやくシーンだが、この時額子がある重大な決心をしていたことが、その直後に明らかになる。大学時代の男と女の付き合いは、加藤とメグミのようにスナリ結婚まで進むこともあれば、別れることもある。しかし、別れるまでには互いに何らかの違和感を感じたり、別の男や女の気配を感じるものだ。しかし、本作にみる額子のヒデに対する別れはあまりにも強引だから、これにヒデが大ショックを受けたのは当然だろう。その別れは、公園に連れ出されたヒデが、大きな木に両手を後ろ手に縛られた状態でパンツを下ろされ、あるサービスを受けた後突然宣告されることに。小泉純一郎元総理の言葉は短いのが特徴だったが、額子の別れの言葉も同じ。それは「結婚するんだ、私」と「遊び意外のなんだって言うんだよ」の2つ。さあ、額子との仲が突然「これにてジ・エンド」となったヒデの喪失感とは？『ノルウェイの森』よりこっちの方がよほどホントの喪失感では？

## ■□■男はかくも過去をひきずる動物？■□■

私は大学時代ビールを一杯飲んだら顔を真っ赤にしていたが、弁護士数年目くらいから少しずつ強くなり、今や酒の全くない日は年に数日のみ。19歳の大学生ヒデもそうだったが、ヒデの父親は毎晩飲んでいたので、息子も血筋としては酒は強い方？親友の加藤と喫茶店で話す時にもビールを飲んでいるヒデを見て「こりゃ少しヤバイのでは？」と思ったが、今ドキの聞きわけのない軟弱な若者は、額子との魅力的なセックスに全然歯止めがかからなかったのと同じように、酒にも歯止めがかからないようだから大変。1年の留年くらいは取り戻せば何とかなるだろうが、せっかく額子とは正反対の(?)清楚な年上の女性・翔子(白石美帆)との新たな交際が始まったのに、無断欠勤をするわ、酒の匂いをプンプンさせながらの出勤をくり返したのでは、そんな若者の将来はきっとアウト。そんな心配をする母親(浅田美代子)に対してテーブルをけとばしたり、姉の結婚式でさらした醜態を見れば、ヒデは完全なアルコール依存症であり性格破綻者だ。さらに、加藤とメグミの結婚式で不思議な女友達だった山根ユキと再会しても、今度はユキの方が将来有望な株のデイトレーダーから新興宗教にかぶれる女に変身していたから、2人の仲の復活もなし。ヒデは一体いつまで額子の喪失感をひきずればいいのか？男ってかくも過去をひきずる動物なの？つくづくそう思ってしまう。

そんなヒデに立ち直りのきっかけを与えたのは、かつてヒデとのセックスのたびにペランダに追いやられていた額子の愛犬「ホシノ」であり、「ホシノ」が導いていったあのおでん屋「よしたけ」だった。額子の母親から結婚後の額子の不幸を聞き、自分の弱さをはじめ母親にさらけ出したヒデの立ち直りは？「断酒・グループ・セラピー」に参加し、つらく長いアルコール依存症との闘いを終えたヒデは、今新たな職場である小さな中華料理屋でのバイトに励んでいたが、これが意外と順調。店のオーナーに気に入られ、その一人娘からも熱い視線を寄せられていたが、さあヒデの立ち直りはどちらの方向で？

## ■□■「10年後」の局面は？■□■

私が1967年の大学1回生の時に読んで大きな影響を受けたのが、柴田翔が1964年に芥川賞を受賞した『されどわれらが日々』とサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』だが、柴田翔は1966年に第2作として『十年の後』を出版した(『贈る言葉』に収録)。これはタイトルどおり大学時代付き合っていた2人の10年後を描いた小説だったが、本作後半の注目点は10年後のヒデと額子の姿。そこでは、あの公園での出来事以来完全にスクリーン上から姿を消していた内田有紀演ずる額子の10年後の姿に大注目！

いくら演技派を目指していても女優はやはり老婆役はやりたくないはず。ところが、37歳になった額子はミニスカートに皮ジャン姿と今なおツッパリ系だが、驚くのはその白髪。今は真っ白な髪になっている私だって、37歳の時はこんなに白くなかったので

は・・・？他方、10年前は目の前のセックスという餌このべつまくなしに食いついていたヒデだったが、そのヒデは今や翔子を知り、ユキを知り（？）それなりに女性関係は豊富。そんなヒデが額子の恐さを用心していたのは当然だから、ラストに向けて突き進む2人の交際（？）の中で注目すべきは、いつ2人のセックスが始まるのかということだ。毎週のように額子が住む山の中の一軒家を訪れるヒデだが、そのチャンスの芽は食事の時？それとも額子の求めに応じて、額子の右腕を洗ってやったり、腋の毛を剃ってやる時？そんな中、終バスで帰ろうとするヒデに対して「じゃ、いつセックスすればいいんだよ！」と迫り、「それしかないのか。おめーは」と返すヒデに対して「そうじゃないけど・・・。セックス以外、どうやってあんたと繋がればいいんだよ」と更に迫ってくる額子のセリフは絶品だ。本作の前半は、清純派女優であるはずの内田有紀が「やりゃーいーんだろ、やりゃー」とか「女みたいな声出すんじゃねーよ」等々、蓮っ葉なセリフを連発しながらきわどいシーンに挑戦したが、10年後を描く後半にはそのようなシーンは一切登場しないから、そのコントラストにも注目。子供を連れて実家に戻っていたヒデの姉はヒデが額子のもとに入り浸っていることに反対し、「2度とあの時のような思いはしたくない」と訴えたが、ヒデの決断は？小さいながらも中華料理屋の娘と結婚して店を継ぐというせつかくのチャンスを自ら放棄したヒデは今29歳だが、無職。他方37歳の額子の方は父親が残してくれた小さな家があるものの、こちらも大した収入はなし。しかし、互いに10年間学んできたものがたくさんあれば、ひょっとしてこんなばかもの同士の結婚もうまくいくのかも？最後にヒデから額子に対してつぶやかれる「ばかもの」というセリフは、さてどんなシーンで？それはあなた自身がしっかり確認し、こんな2人のばかもの将来をしっかり見守ってやりたい。

2011（平成23）年1月5日記

## 「放置自転車」対策の怪！

1) 私は都市問題と景観問題の専門家だと自負している。また職住近接の価値を実感し、それを実践した私は車を売り払い、ここ10年の交通手段は専ら自転車だ。ところが、「ひたたくり」と共に主要駅周辺の放置自転車数日本一を誇っていた（？）大阪市がその対策に取り組んだ結果、その数は激減！

2) しかし、中心部への車の乗り入れを規制せず、市民がもっと積極的に活用す

べき自転車を毛嫌いするのはナンセンス。有料駐輪場が圧倒的に不足しているためやむをえず目立たないところに停めている自転車を勝手に「放置自転車」と決めつけ、その持ち帰り数を競う大阪市のバカ行政には腸が煮えくり返っている。そもそも、放置自転車とは何？その定義を含め、都心部の交通体系を根本から議論しなければ・・・。

2011（平成23）年5月30日記